

ニッチ式

前川 啓二

千葉菌類談話会通信の原稿の束もやれやれやと校了だ、そんな矢先「このままじゃ通信が虫食いになるから埋め草をなんか書くよーに。どーせヒマでしょ」とのメールが通信事務局から唐突に届いた。さあどうしようどうしよう。

フトンをかぶってうなされているうちにいつしか白河夜船。船で渡りながらついでにあれこれ夢を見た。それはとてもウツツのものとは思えない。夢だからしかたがないか。夢の一部始終が不思議にも鮮明だったので以下に披露したい。どことなくつげ義春氏の作品に似ていたらご勘弁。

... こんなところに原稿の空きスペースができるとは思わなかった。原稿がメメクラゲに噛みちぎられてしまったのだ¹⁾。

当然編集作業は中断された。一刻もはやくニッチを埋めなければならないのだ。

しかし不案内なきのご知識で埋め草の素材を捜すのは容易なことではない。しかも切断された原稿のページがずれないように行数を上げ下げしていなければならないのでうっかり改行もできないのだ。すこしでもずれてページ数を食ってしまうとたちまち印刷料がはね上がってしまうのだ。

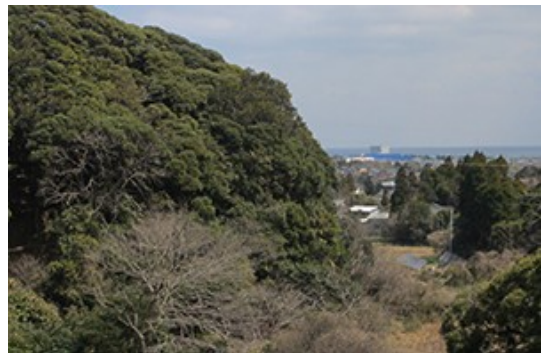
ぼくは必死になってネタを捜しながら自分に言い聞かせる。

「通信が欠号になるかもしれないんです

よ！ほら編集元締めの人K川女史の顔がだんだん蒼褪めていくではないですか...。」

そうだ、房総に行けばきのこネタがあるかもしれない。おお そうじゃ。上総の大多喜町にはハツタケがあるという。「いすみ鉄道」でそこまで行ってみよう。

だが、なんと、その国鉄特定地方交通線転換第三セクター鉄道は日中は2時間に1本しか走っていないではないか！ 気を取りなおして乗り換え地点の大原を東に歩き海辺の叙景にひたってみた²⁾。



房総のいすみ市大原の高台から太平洋を望む。海岸までこんもりとした照葉樹林

「ああ ぼくはなんて無駄な時間をつぶしてしまったのだろう。よしこうなったら徹底的に大多喜の町中を捜すぞ。」

旅館「寿恵比楼」の向かいのアカマツ山がハツタケのポイントだという³⁾。しかも同町の西部田集落にはマツタケさえあるらしい⁴⁾。

そこで、沼を越えて行ってみた⁵⁾。けれども大多喜の林は、ちくしょう、照葉樹とスギば



大多喜町の旅館「寿恵比楼」(現在は廃業)



大多喜町の西部田集落



散弾銃をズドンと撃ちたくなる沼。これも大多喜町

かりではないか。

路傍の金太郎飴売りのおばあさん、なにか知っていますか？

「どんなきのこを捜しているのかね。」

「ハツタケです。できたら青変することが絶対必要なのです。そしてアカマツの林にはえていたらなお好都合なのです。」

「すると勝浦の朝市で売っているきのこのことだね。」

「そのとおりです。でももしかしたら房総ではアカモミタケのこともハツタケと呼ぶのではないですか。ねッ じつはそうなんでしょう。」

「これには深一いわけがあるのです。シクッ、シクシクシク。」泣き出したおばあさん。

「どんなわけです。教えてください。」

「それには談話会通信21号と25号の報文を読まなければならないのです^{6、7}。同じチチタケ属だから実は似ているのです。その証拠にほらポキン、ハツタケ」

「なるほど細胞が丸くてもろいからポキン、アカモミタケ」

そこで目がさめた。焦燥がそうさせたのかなぜか柱時計の中で寝入っていた。

でも考えてみればそれほど締切をおそれることもなかったんだな。締切なんて2月に入ってから原稿がずるずる集まる恐怖と比べたらどうってことはないんだから。

そういうわけで原稿のニッチに出会うとぼくの右腕はしびれるようになったのです。

参考文献

- (1) 『ねじ式』 つげ義春 「ガロ」 1968年6月増刊号 青林堂
- (2) 『海辺の叙景』 つげ義春 「ガロ」 1967年9月号 青林堂
- (3) 『初茸がり』 つげ義春 「ガロ」 1966年4月号 青林堂
- (4) 『西部田村事件』 つげ義春 「ガロ」 1967年12月号 青林堂
- (5) 『沼』 つげ義春 「ガロ」 1966年2月号 青林堂
- (6) 吹春公子 『千葉県産ハツタケの正体見たり!』 千葉菌類談話会通信21号 (2005年)
- (7) 吹春俊光 『勝浦の朝市のきのこ』 千葉菌類談話会通信25号 (2009年)